

宮島詠士

みやじま いたひさ

書家、漢學者、支那語教育者。慶應二年十月二十日

出羽國米澤生れ、昭和十八年七月九日歿（六七一—一九四三）。諱ミヨ美、字

詠士、通稱大八、考。號世木山樵、勗齋、詠歸山人、詠歸廬主人、詠

歸生、詠歸草廬主人、詠而歸廬主人、詠而歸廬主考等。父は米澤藩士

宮島誠一郎（號栗香）。明治十四年興亞學校に入り、張袖海の語學を

學ぶ。翌年今日併した外國語學校に轉じ、川島浪迷、長谷川辰之助（一

葉亭四迷）、長瀬鳳翔等を知る。その後も陳積鏗に就く經書を學ぶが

ど、専ら古典を勉學。二十五年渡支、曾國藩の高弟張廉卿の門に入りて

書法を修めた。師の歿後、自清戦争勃発により歸國。帝國大學文科大

學、東京外國語學校等の講師を務め、また自宅に詠歸舎（二十一年著

隨書院と改稱）を設けて漢籍、支那語を講じた。晩年觀音公歸依して

鐘海觀音會（鐘海、法話會）を催すなどした。

書に於ては天下第一と稱せられ、師廉卿歿後歸國の際には、同門人

から「吾書東すくと稱せられたといふ。四十一年築鴨米井基地の建

立の一葉亭四迷墓表を始め、根津山洲、小越正陸、大養毅等の墓表、

碑文も書す。

著書に、『支那語獨習書』（明治二十二年九月十六日東京隨書院）、談話

『詠而歸廬講話』（藤本恒雄監録、昭和

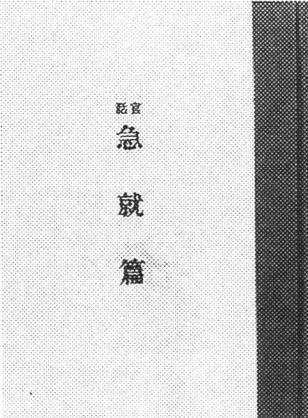
二十年七月十日藤本恒雄編）等の中、最

も普及したものの、『官話就篇』（明治二

十七年初刊）がある。

昭和八年の改訂（改

題『官話就篇』（もとの頁一七六版を重ね、東京外



官話就篇

